二〇二三年一二月一七日

雪吊の波打つてをる水鏡　かえる
紅葉散る御寺の庭の静寂かな　うつぎ
象嵌のごと木の実敷く石畳　むべ
オリオンもスイングしたる野外フェス　素秀
石仏の苔の裳裾に散紅葉　うつぎ
橋半ばのぞく底ひの渓紅葉　ぽんこ
苔庭にしるき網目や枯木影　康子
箒目のさざ波に散る庭紅葉　あひる
湧水の岩場を綴る石蕗の花　康子
茶寮なる玻璃戸に歪む紅葉影　よう子
御寺なる名に負ふ庭の散紅葉　せいじ
持ち帰り遺影に手向く散紅葉　たか子
暖炉の火サルサ踊りをしてやまず　素秀
愉しくてやがて寂しき忘年会　わかば
おしやべりの止まぬ小春の吟行子　澄子
ぼけ封じ詣で要らぬと日向ぼこ　もとこ
幾重にも枝さし交はす峪紅葉　こすもす
湖涸れて島へ繋がる道現るる　隆松
朱の欄に触れてかつ散る寺紅葉　よう子
小柴垣囲ひの茶寮竹の春　わかば
石仏の頬ゆるむやに冬日燦　小袖

吟行句会みのる選

二〇二三年一二月一七日